

## 初期仏教における比丘の生活様式

——頭陀行者の系譜——

藪 内 聡 子

[1] 初期教団の仏教者たちは、時代を下るに連れて遊行から定住へと生活様式を変え、やがて教団が組織化されるとともに、持律者と持法者という異なった系譜が誕生した<sup>1)</sup>。本稿は頭陀行者、そして頭陀支をめぐる問題を検討し、持律、持法という二つの系譜に加え、更に頭陀行を実践する者の流れが、教団内に重要な役割を担って存在していた可能性を指摘しようとするものである。それは時に持律者、持法者の対立を和らげ、教団の分裂を阻止する緩衝役として機能している。

[2] 最初期の比丘の生活は阿蘭若、樹下、塚間などを臥坐所としながら遊行し、托鉢によって食を得、塵溜、墓場にあるボロ布を衣とするものだった。やがて精舎での集団生活が始まると、食事は請食、寄進で賄われ、布施された衣の着用が許され、修行者の生活は戒律遵守へと変化した。しかし最初期の比丘の生活様式である頭陀の精神は尊重され、やがて異なる類型の頭陀支として纏められる<sup>2)</sup>。

一方サンガが拡大するにつれ、修行者たちは、主義主張の似通った者たち同士で連繫を保ち、専門的な能力をもった伝持者のそれぞれがグループをなして修行することになった。そして教法保持についての分離、専門化が進み、持律者、持法者はそれぞれ同じところに臥坐所をしつらえられ、Kosambikkhandaka に現れる僧伽抗争の伝説は、Kosambi-Jātaka や Dhammapadattakathā から持律者と持法者の争いであったことが指摘されている<sup>3)</sup>。このとき抗争の当事者たちは、頭陀行者に助言を求めたことが、Theragāthā-Attakathā (ThaA.) には記されている。

のちにコーサンビーで比丘サンガが二つの集団に分かれて争いがおこった時、一人の比丘はこの争いを避けたいと思って、「今まさにサンガが二つの集団に分かれて争いが起こっている、私はどのようにしたらよいのでしょうか」と尋ねると、彼(ウパセーナ)は自分の実践を遠ざかり離れてすむことから語り始めている。(ThaA. IIpp.246-247.)

修行者は、独り瞑想するために、遠く離れ、騒音の少ない、猛獣が出没する坐臥処を受用すべきである。// Tha.577 // ……感官の門を守り、よく自制した修行者は、心をつつましくして、家ごとに順次に托鉢に歩むべきである。// Tha. 579 // ……

世尊の時代に彼はコーサンビーのパラモンの家に生れた。彼の名はチューラガヴァッチャといった、……当時コーサンヴィーに住む比丘たちは争いを起していた。その時チューラガヴァッチャ長老はどちらの比丘たちの主張にも与せず、世尊によって授けられた論しに住し、観を増大させ、阿羅漢果に達した。それゆえ、譬喩を唱えた：パドゥムウッタラ世尊のスジャータという名の弟子は、そのとき、糞掃衣を求めて塵埃の中を歩いていた… (ThaA. I.p.58.)

Vinaya (Vin.) にはウパセーナが語ったとされる以下の記述がある。

世尊よ、私に具足戒を請う者に私は次のように言います。『友よ、私は実に阿蘭若住者、乞食者、糞掃衣者である。もし汝もまた阿蘭若住者・乞食者・糞掃衣者になるならば、私は汝に具足戒を授けよう』と。彼がもし私に承諾すれば具足戒を授け、承諾しなければ具足戒は授けません。…世尊よ、私は実にこのように比丘たちを導いております』と。 (Vin. IIIpp.230-231.)

精舎での集団生活が進むなかでも頭陀行者は存在し、しかも彼らは、持律者、持法者のどちらにも与しない存在であったと考えられる。またウパセーナのように、頭陀行者にのみ具足戒を授けるという頭陀行者もいたことから、頭陀行者だけの系譜が存在していたことがわかる。さらにここで注目すべきは、持律第一と称されたウパーリは、阿蘭若での修行、すなわち頭陀行をブツダに止められ、ブツダのそばで、集団生活の中で修行を行っていたことである。

彼は出家して具足戒を受けて、ブツダの近くで業処を理解してのち、「世尊よ、私に阿蘭若住を許可してください」と言った。世尊は「比丘よ、汝は阿蘭若に住んでいるなら務めがひとつ進むだけであろう。しかし私のそばで住んでいるなら、観法と学習が完成してゆくであろう」と言った。(ウパーリ)長老は師のことばを信じて受けとめ、観について修習しつつまきに程なく阿羅漢に達した。(ThaA. II.p.101.)

信仰によって世を捨て、新たに出家した新参の賢い修行者は、サンガ(集団<sup>9)</sup>)のうちに住みながら、戒律を学ぶべきである。// Tha. 250 //ウパーリ長老

[3] 頭陀者の実践項目はのちに頭陀支として、南伝系統では13支に纏められ、南方上座部の正説となった Theragāthā (Tha.) 844-856<sup>9)</sup>, Cullaniddeśa (p. 231), Milindapañho (p. 359), Visuddhimagga (pp. 59-83) の系統の13頭陀支と、Vinaya Parivāra (V. pp. 131,193) の13頭陀支が存在するが、それらは頭陀支の順番、配列が異なる系統のものである。頭陀支は、(1) 全体を衣食住に配分する流れと (2) まず衣食住の諸支の代表を一支ずつ出し、特に「阿蘭若住支」を第一支にあげる流れの二つに分類できる<sup>9)</sup>。Parivāra の13頭陀支は (2) の流れであり、この形成経路については、Vin. の五型 (III. pp. 230ff など) の前3支がいずれも阿蘭若住支、

常乞食支、糞掃衣支であり、またこの3支と同型の *Samyutta-nikāya* (II. p. 281) 説が頭陀支の原型とみられていることから、この基本型に、*Tha.* 1120, *Anguttara-nikāya* (III. pp. 219-221), *Mahāniddeśa* (p. 66 など) 等の頭陀支を総合して纏められたと推定されている<sup>7)</sup>。この説に従うと、*Parivāra* の説は持律者の伝承に持法者の伝承を取り入れつつ完成された頭陀支と見なすことができる。一方 *Tha.* 844-856 等の13頭陀支は(1)の流れに属するので、*Parivāra* のものとは違う過程で形成されたものである。律伝承の第一におかれるウパーリの修行態度からして、律を継承する者たちが実際に頭陀行を実践していたかどうかは不明である。*Parivāra* と異なる頭陀支が存在するという事は、持律者の伝承とは別の伝承をもつ集団の存在を示し、頭陀行者の独立性が暗示されている。実際 *prahāṇika* という碑文も発見されており、ある種の苦行者の集団が存在した形跡がある<sup>8)</sup>。

[4] ブッダの滅後行われたとされる第一次結集は、頭陀第一と称されるマハーカッサパの采配のもとに、持律第一のウパーリが律を、多聞第一のアーナンダが法を誦出し、それらを選出された阿羅漢たちが承認するという形で執り行われたことをも考慮すると、最初期の教団における教法伝持の構造は持法者、持律者、そして頭陀行者という三構造であったと解するのがよいのではないだろうか。ウパーリが頭陀行者ではなかったことは本稿で取り上げたが、アーナンダとマハーカッサパは修行方法も違い不和であったこともこれまでの研究で指摘されている<sup>9)</sup>。

- 
- 1) 塚本啓祥 [1980]『改訂増補初期仏教教団史の研究』, 山喜房仏書林, 第Ⅲ篇5章など。
  - 2) 早島鏡正 [1964]『初期仏教と社会生活』, 岩波書店, 第一編, および阿部慈園 [1989]『インド仏教文化入門』, 東京書籍, 三章など。
  - 3) 塚本前掲書 pp. 387-392 など。
  - 4) *saṅghasmin viharan ti, saṅhe bhikkhu-samūhe vatta-paṭivatta-pūraṇa vasena viharanto.* (*ThaA.* II. p. 102.) 以下テキストはいずれも PTS 版による。
  - 5) *Tha.* の13頭陀支と *CNd. Mil. Vis.* の13頭陀支は、2支と3支が入れ替っている。
  - 6) 早島前掲書 pp. 77-83。
  - 7) 阿部慈園 [1980]「Pāli Vinaya における頭陀説」、『印度学佛教学研究』28-2, pp. 920-924。
  - 8) 静谷正雄 [1978]『小乗仏教史の研究』, 百華苑. p. 47. 塚本 [1980] pp. 504-505。
  - 9) 平川彰 [1991]「大迦葉と阿難との不和」『平川彰著作集 第2巻 原始仏教とアビダルマ仏教』, 春秋社. pp. 150-157. 並川孝儀 [1999]「ゴータマ・ブッダ滅後の教団とアーナンダ」『仏教大学文学部論集』第83号. pp. 1-17。

〈キーワード〉 持律者, 持法者, 頭陀行者

(東京大学大学院)